

英語圏の歴史と言語

—アイルランド英語の2人称代名詞の用法と多様性—

A Study of Usage and Variety of the 2nd Person Pronouns of Irish English

加藤 直良

Naoyoshi KATO

ABSTRACT

The purpose of this article is to examine how Irish English has been created and developed. Specifically, the article aims to reveal the usage and variety of the 2nd person pronouns of Irish English. According to the history of Ireland, there had been many influences through foreign countries and invaders or settlers such as Romans, Anglo-Norman, Scots, British, Vikings etc. With Anglo-Norman invasions of the twelfth century, UK ruled Ireland to establish the English language. On the contrary, ironically, it was the Irish who were to help spread English to other countries including Australia, New Zealand, Newfoundland.

As regards the usage and variety of the 2nd person pronouns, a difference between the singular second person pronoun *you* and plural second person pronoun *ye* can be found in many works. During the Old and the Middle English periods there were various variations and usage, but as time went on, during the Middle English period *you* became the most common form for both singular and plural.

序論

2013年6月17日、G8サミット主要8ヶ国首脳会議が開催されたことは、記憶に新しい。開催地は北アイルランド。長きにわたり紛争が絶えないアイルランドの地に於いて、首脳会議が開催されたその意図するところは、平和と治安の安定を国際社会に強くアピールするものであった。30年以上も続く北アイルランド紛争、治安部隊が闊歩していた北アイルランド最大都市ベルファーストにも、その面影は今はない。しかしながら宗派対立が引き起こす、

根深い、理屈では解決できかねる様々な困難な事情を抱えたままであることは間違いのない真実である。ピースラインと呼ばれる異なる双方の宗派を分離する高い壁が相当数残存する市内、イギリス国旗とアイルランド国旗を宗派の相違で掲げられる北アイルランドの現実、かつてはイギリスの統治下にあったアイルランドの歴史は複雑で多様な様子を呈することになる。この論文では、歴史を紐解きながら、アイルランド英語の実際に触れるものである。特に今回は二人称代名詞に焦点を当て、いかなる影響のもと変遷し定着してきたのか、また逆に諸外国の英語にアイルランド英語がどれほどの影響を及ぼすことになったのか明確にするものである。

1. アイルランドの歴史概観

この論文では、アイルランドの言語事情に特に影響が大と考えられる以下の歴史項目に焦点を当て論じることとする。(1) ローマキリスト教の伝来(5世紀)とプロテスタントの入植、(2) ヴァイキングの襲来、(3) アングロ・ノルマン人の征服と統治、(4) 大飢饉と国外移住

(1) ローマキリスト教の伝来とプロテスタントの入植

ローマ帝国の侵攻侵略は、イギリスに対しても例外ではなかった。ローマ軍は1世紀末にはイギリスを征服し、種々の影響を及ぼす結果となった。しかしながらイギリスとは違う、征服するに値しないと判断された辺境の地、アイルランドはその難を逃れ、ローマ帝国の支配を完全に免れた経緯がある。5世紀頃になりローマカトリック教が伝えられた。それ故、書き言葉としてのラテン語が導入され、それまでのアイルランドの口承文化が文字で書き記され後世に文学として残されることとなった。

16世紀後半から17世紀にかけて、プロテスタントがスコットランドよりアイルランドに入植し、北部と中部地方に定着した。さらに同時期にイングランド中西部からも北アイルランドの中南部に入植した。北アイルランドの英語がスコットランド英語によく相似していると言われる所以である。⁽¹⁾

(2) ヴァイキングの襲来

9世紀頃ヨーロッパ大陸へ侵略と略奪を目的としたヴァイキングがアイルランド海岸地帯に出没する。彼らは、アイルランドのあらゆる富の中心となっていた修道院を襲撃し略奪を繰り返した。約40年にわたりアイルランドはヴァイキングの侵略地と化したのであった。当時ヴァイキングに対し総力戦で抵抗する戦力や戦略を指示する指揮官の存在もなく、多くの修道士が殺

害されたようである。沿岸部から徐々に侵略が内陸部へと拡大し始めたが、幸か不幸かヴァイキングたちの興味はイングランドへと移り、大きな襲撃はなくなった。ダブリン、リムリック、ウォーターフォード、ウエックスフォード、コークに彼らは次第に定住し町を築いていった。特にダブリンは彼らの交易の中心都市として、大いに利用されたのである。⁽²⁾

(3) アングロ・ノルマン人の征服と統治

1066年のアングロ・ノルマン人の征服により、イングランドはノルマンディー生まれのフランス人、ヘンリー二世の支配下にあった。英語とフランス語がこの時期に構築されることになり、いわばバイリンガル状態であったと指摘する研究者もいるほどである。(see Hickey 2007)。1171年ヘンリー二世はアイルランドにわたり、先にレンスター王となったストロングボウの権力が巨大化することを嫌い、自らが宋主権を獲得した。長きにわたるイングランドの支配が確実なものとなり、イギリス王室の絶対的な君臨が始まったのであった。14世紀初頭までにはアイルランド島の4分の3を征服統治したといわれている。⁽³⁾

(4) 大飢饉と国外移住

国外への移住を決断させることになった要因の一つに、1845年後半に発生したジャガイモの胴枯れ病による大飢饉である。当時下層階級の民の主食であったジャガイモの凶作は致命的であり、その結果多数の死亡者と新天地を求めた国外移住者が増加し、そのためアイルランドの人口が激減した。⁽⁴⁾

アイルランド人が祖国を離れ、他国に移住し始めたのは、この大飢饉時が初めてではないが、結果的に、この小国が大国にアイルランド英語を広める事となった。アメリカの独立に端を発し、オーストラリアへ囚人として送り込まれたのは、アイルランドの若者であったし、カナダのニューファンドランドでは、アイルランド共同体なるものが確立され、最もよくその形態が保持されていると言われている。アメリカ、イギリス本土、バルバドス島、オーストラリアなど、世界中にアイルランド人とその言葉が影響を及ぼしたのであった。⁽⁵⁾

2. アイルランドの言葉（言語）

歴史的背景を考慮し、アイルランドで使用されている言語群について、調査しまとめてみると、1949年にイギリスより独立したアイルランド共和国は、第1言語はアイルランド語、第2言語を英語と定めている。2006年4月23日

に実施された国税調査によると166万人の人達がアイルランド語を話すことができ、それは総人口の41.9%に相当する。特に Gaeltacht として知られているアイルランド語常用地区においては普段の生活においてその地区の住民の70%以上がアイルランド語を話しているという結果になっている。⁽⁶⁾

1366年に Statutes of Kilkenny が制定される。この法によりアイルランド在住のイギリス人は英語を日常的に話す事、イギリス流の慣習やファッションに従うなど、厳しく定められている。法に背く場合は、領地の没収が明記されている。

it is ordained and established, that every Englishman do use the English language, and be named by an English name, leaving off entirely the manner of naming used by the Irish; and that every Englishman use the English custom, fashion, mode of riding and apparel, according to his estate; and if any English, or Irish living among the English, use the Irish language amongst themselves, contrary to his ordinance, and thereof be attained, his lands and tenements, if he have any, shall be seized into the hands of his immediate lord, until he shall come to one of the places of our Lord the King, and find sufficient surety to adopt and use the English language, and then he shall have restitution of his said lands, by writ issued out of said places. (quoted in Crowley 2000:15).⁽⁷⁾

厳しい法の下での、言語管理ではあったが、言葉をコントロールすることは簡単な事ではなく、アイルランド語を話し、使用することが日常的なものとなっていたようである。

16世紀後半から17世紀にかけ、プロテスタントが入植し定住することにより、英語が主要都市に拡大定着し始めた。

1) アイルランド英語定義

アイルランド英語について種々の定義が存在する。Todd 1999を引用し、記述した。

Irish English

- (1) Planter English= Planter English is represented by two varieties, namely Anglo-Irish and Ulster Scots.

Anglo-Irish is a variety of English spoken over most of Ireland. It is

descended from the English brought to Ireland by planters from England, modified by contacts with Irish, Ulster Scots and Hiberno-English.

- (2) Hiberno-English= This is a range of English spoken by people whose ancestral mother tongue was Irish. (quoted in Todd 1999)

2) アイルランド英語の特色

アイルランド英語と Old English, Middle English 並びに Early Modern English を比較することにより、相互に及ぼした影響を考察し、その実態を明確にする。この論文では、二人称代名詞についてのみ扱うこととし、他の様々な事項については、今後の発表で明確にすることとする。

(1) *you* (2人称・現在・単数) と *ye* (2人称・現在・複数)

アイルランド英語には、標準英語とは異なる表記法がある。その一つが2人称代名詞である。*you* は現在・単数の人称代名詞として、広く使われている。

現代英語では *you* が単数・複数の両数に使われ、時に数の混乱を引き起こす場合もある。アイルランド英語では、単数の場合の *you* と区別するために、様々な方法を駆使し使用してきたことが明らかである。それが *ye* を複数として使った理由の一つと言える。また *you* の複数形としてその変化形も使われた。複数形である事が一目瞭然と考えられる *yous*, *yez*, *yiz* の存在である。(see P. W. Joyce 1991)

アイルランド島において、特にアイルランド語の使用を長きにわたり継続した地域、Munster 州や Connaught 州においては、*ye* の使用が90%を超え、逆に *youse* は70% 以下である、また *yez* においても同地域・州においては30% と低い数値で、*ye* の使用が90%を超えたと Hickey は指摘している。⁽⁸⁾

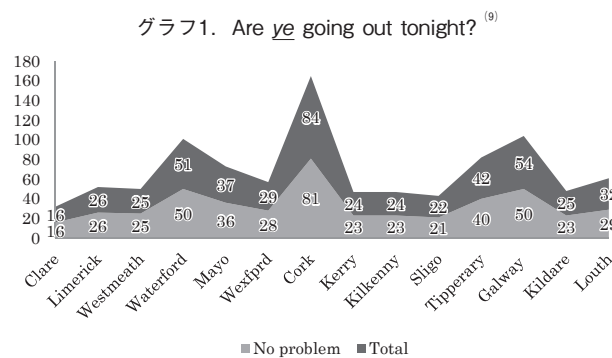
さらに二人称代名詞の複数形 *ye* について、emigrant letters によく見られると指摘している。

- a. And would ye have to wear a uniform? (TRS-D, U41, F)
- b. You had a black and white apron and a cap on ye. (TRS-D, U41, F)
- c. Ye shovel off the stuff. Then ye slice the turf down the whole length of the spade. Ye put it in a barrow and ye wheel it away out. (TRS-D, U41, F)
- d. Yeah, ye all could go yourself if ye wanted. (WER, F55+)

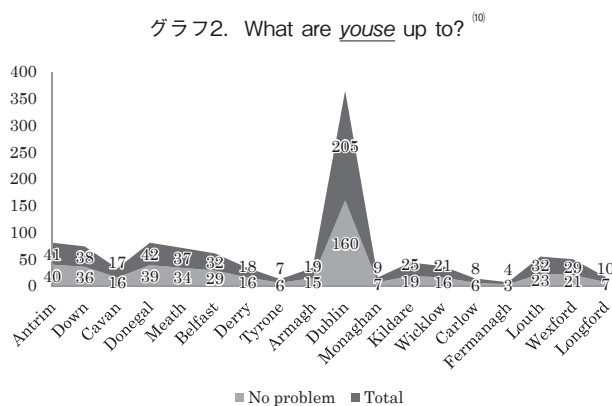
(quoted in Hickey 2007: 238)

(TRS-D, U41, F= Tape-Recorded Survey of Hiberno-English Speech-Digital. U41 refers to the speaker from point U41 on the grid of Ireland. F=a female speaker. WER= Waterford English Recordings.)

グラフ1. は調査文章：Are *ye* going out tonight? に対し、アイルランド南西部のMunster地方に属する6州(Clare, Limerick, Waterford, Kerry, Cork, Tipperary)並びにConnaught地方のMayo, Galway州の回答者がその使用に対し、問題がない(No problem)と回答した。

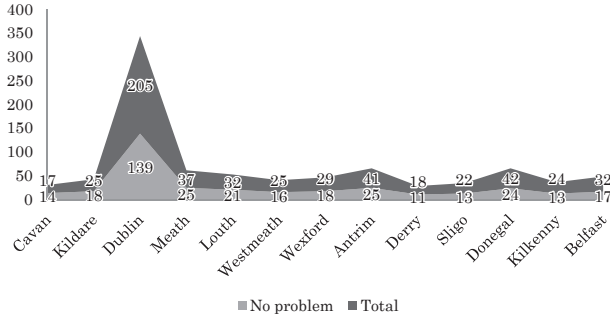


グラフ2. は調査文章：What are *youse* up to? に対する回答結果である。アイルランド北部Ulster地方のAntrim:98%, Down:95%, Cavan:94%並びに東部Leinster地方のMeath:92%, Dublin:78%に集中した結果となっている。



グラフ3は調査文章:What were *yez* up to? に対する回答結果である。東部の Leinster 地方に集中していることがわかる。Cavan:82%, Kildare:72%, Dublin:68% などが高い割合を示す結果となっている。

グラフ3. What were *yez* up to?⁽¹⁾



(2) 古代英語・中世英語との関連から検証

古代・中世英語期では、二人称代名詞はいかなる形態をとり使用されていたか、そこにアイルランド英語の場合と何らかの共通性や類似性が読み取れるか検証してみる。それぞれの国において、一つの言葉ないしは用法がその国において定着し、日常的に使用されるようになる過程においては、様々な要因が考えられる。一つには征服・支配した国の権力下に置かれたいわゆる被征服国の言葉の場合である。この場合は、明らかに支配国の言語がその地の言葉となるケースが多いと言える。また逆に、支配圧制したにもかかわらず土着の言葉に同化し、交流を深めた場合は、当然土着の言葉が主となる。二人称代名詞の場合もアイルランドへ外国からもたらされ広がり定着していった場合と、移民として他国に出て行ったアイルランドの民の言葉も、移住先で多大なる影響を及ぼすことになった場合も当然予想できる。

- (a) *ƿe cildra biddað ƿe, eala lareoþ, ƿæt þu tæce us sprecan forþam unƿelærede ƿe syndon 7 ƿeþæmmodlice ƿe sprecað.*

Hƿæt þille ƿe sprecan?

(Garmonsway: *ÆLFRIC'S COLLOQUY*. l. 1-4)

古代英語の例であるが Dat. Sg. の *ƿe*, Nom. Sg. の *þu*, さらに Nom. Pl. の

3eを確認できた例である。古代英語では屈折組織が明確に確立されていた時代である。人称代名詞においても、確立した二人称代名詞を多数確認できる。

古代英語期の二人称の単数並びに複数の活用形は次の通りである。

Case	Singular	Plural
Nom.	<i>þu, thou</i>	<i>ge, ye</i>
Acc.	<i>þe</i>	<i>ēow</i>
Gen.	<i>þīn</i>	<i>ēower</i>
Dat.	<i>þe</i>	<i>ēow</i>

(Campbell 1959: 288)

- (b) Betere is þat þu henne gonge
 Pan þu here dwelle longe;
 Hepen þou mayt gangen to late!

(Bennett: *Havelok the Dane*. l. 111-113)

中世英語初期作編 *Havelok the Dane* の二人称現在単数の例である。この例では、古代英語期に常用されたと思われる *þu* が頻繁に確認できた。

- (c) Þench hwet *tu* ahest Godd for his goddeden.

(Bennett: *Ancrene Wisse*. l. 19)

Ancrene Wisse に見られた二人称現在単数形の例である。*thou* の変形 *tu* の形が確認できた。

- (d) And seyde, ‘Hwat are ye þat are þeroute,
 Pat þus biginnen forto stroute?

(Bennett: *Havelok the Dane*. l. 205)

中世英語初期作品 *Havelok the Dane* の二人称現在複数の例である。最も標準的な主格形の *ye* である。中世英語初期は古代英語期で充実していた屈折組織が徐々に崩壊し始めた時期であり、様々な屈折が消滅あるいは統一される変遷期でもある。

中世英語期後期の作品を調査してみる。

- (e) And if þow rechez me any mo, I redyle schal quyte

(Sisam: *Sir Gawayne and the Green Knight*. l. 256)

- (f) And also *ȝee* schull vnderstonde þat the Iewes han no proper
lond of hire owne,..... (Sisam: *Mandeville's Travels*. l. 187)

中世英語期の二人称単数並びに複数の区別が明確な例を列挙した。この時期の他の作品においても多数確認できた。次の (g) の例文のように、本来であれば複数形とみられる *ye*, *yow* の用法が単数形として使用されている例である。

- (g) Now, lege lorde of my lyf, leue I yow ask;
ȝe knowe þe cost of þis cace.....
(Davis: *Sir Gawain and the Green Knight*. 1967. l. 545-546)

中世英語期の二人称現在単数並びに複数の区別は次に示す通りである。

Case	Singular	Plural
Nom.	<i>thou, thow</i>	<i>ye</i>
Acc.	<i>the(e)</i>	<i>you, yow</i>
Gen.	<i>thy(n)(e)</i>	<i>your(e)(s)</i>
Dat.	<i>the(e)</i>	<i>you, yow</i>

(Jeremy J. Smith 1999: 110)

(3) 種々の作品に見られる *ye*

アイルランド英語二人称代名詞 *ye* が作品中に数多く確認することが出来る。*ye* を使用することで、その作者がアイルランド出身ではないか、あるいはその国に多大なる影響を及ぼした、逆に及ぼされた隣国出身ではないかなど、作品から読み取れる真実は実に興味深い。このような関連性を調べてみることも *ye* について調査検討する際の基本的資料となる。

Bartleby.com (Great Books Online)⁽¹²⁾ より、(a), (b), (c), (d) は調査引用したものである。

- (a) YES—and then—Ye whose clay-cold heads and lukewarm hearts can argue down or mask your passions—tell me, what trespass is it that man should have them? or how his spirit stands answerable to the Father of spirits but for his conduct under them. (Laurence Sterne, *A Sentimental*

Journey through France and Italy. Chapter 53. The Conquest. The Harvard Classics Shelf of Fiction. 1917.)

Laurence Sterne (1713-1768)

1713年11月24日南アイルランド・ティペラリー州クロンメルに生まれた。Munster 地方に属するティペラリー州はアイルランド語話者の多い地域として位置づけられている州の一つである。(Drabble 1985)

(b) YE Mariners of England

That guard our native seas!

Whose flag has braved, a thousand years,

The battle and the breeze!

(Thomas Campbell, *Ye Mariners of England*, The Harvard Classics. 1909-14.)

Thomas Campbell (1777-1844)

1777年7月27日スコットランドのグラスゴーに生まれた。商人の息子で、グラスゴー大学で教育を受けた。(Drabble 1985)

(c) GUID speed and fuder to you, Johnie,

Guid health, hale han's, an' weather bonie;

Now, when ye're nickin down fu' cannie

The staff o' bread,

May ye ne'er want a stoup o' bran'y

To clear your head.

(Robert Burns, 69. *Third Epistle to J. Lapraik*, The Harvard Classics. 1909-14.)

Robert Burns (1759-1796)

1759年1月25日スコットランド南西部 South Ayrshire に生まれた。スコットランドの国民的詩人であるとともに、スコットランド語で書かれた詩で有名である。(Drabble 1985)

(d) FAIR is my love, when her fair golden hairs

With the loose wind ye waving chance to mark;

Fair, when the rose in her red cheeks appears;
(Edmund Spenser, English Poetry I: 78. *Fair Is My Love*, The Harvard Classics. 1909-14.)

Edmund Spenser (c. 1552-1599)

1553年にロンドンに生まれた。1580年 Grey 卿の秘書に任命され、後に lord deputy として、アイルランドに渡る。1588年または1589年 Munster 地方の移民のための undertaker (アイルランドで没収した土地を与えられたイングランド人) の一人となっている。Cork 州にある Kilcolman Castle を獲得した。(Drabble 1985)

(4) 諸外国(語)との関連による二人称

本稿では、スコットランド、並びにオーストラリアのみについて記述した。

(a) スコットランド

Youse, yiz は Ulster 地方からスコットランドの Glasgow 並びに西部に入ったものであると指摘している。(Hickey 2007:397)

(b) オーストラリア⁽¹³⁾

オーストラリア英語に見られるアイルランド英語の影響については、山崎「オーストラリアとニュージーランドの英語」⁽¹⁴⁾のなかで、二人称代名詞について Trudgill(1986:140) より引用し次のように記述している。

非標準的なオーストラリア英語には二人称複数代名詞 *youse* が存在する。この語はイングランドにおいてはまず用いられず、用いられているのは Liverpool と Newcastle 周辺に限られる。これらの地域ではアイルランドの影響がことのはか強い。スコットランドでは Glasgow で用いられている。ここもアイルランドの影響を強く受けている土地である。その一方で、この語は極めて日常的に用いられている。

(山崎 2009:115-116)

さらにオーストラリア英語では、二人称単数代名詞 *you* が複数代名詞 *yous, youse* のようにアイルランド口語英語において区別していると記述し John Harris より引用している。

So I said to our Jill and our Mary: ‘Youse wash the dishes.’
I might as well have said: ‘You wash the dishes’, for our Jill
just got up and put her coat on and went out. (山崎 2009: 116)

Australian English Usage には *yous, youse* について次のような記述がある。

This is a slang form of *you*, often addressed to a group of people. The spelling *yous* suggests that it’s plural, on the analogy of regular nouns. 更に ‘In Australia it’s heard in casual exchanges in both metropolitan and country speech, but still associated with a shortage of education.’ (Peters 2007: 878-879)

From English in Australia to Australian English (Clemens 2005) において次のように指摘している。

It is the Irish who spread *yous* to English speaking countries all over the globe (Wright (1905) and Beal (2004:207f)). The cause of this spread are the social and economic disruptions of Irish society in the 19th century which resulted in a mass exodus to the industrial centres of England and Scotland, to North America, Australia and elsewhere. Therefore *yous* can be found not only in Ireland, but also in Liverpool, Glasgow, New York, Chicago, Boston, Sydney, etc. (Clemens 2005: 205)

結論

アイルランドはまさしく小さな大国であった。歴史を紐解くと侵略してきた外国の侵入者に対し、その勢力の強さに屈しはしたが、自分たちの言葉・慣習・感情などは決して碎かれたわけではなかった。アイルランド英語は屈強にも耐え忍んだ。その国の言語に大きな影響をもたらす他国の侵略・入植、さらには宗教の布教などは、この地に於いても例外ではなく大きな影響を受けた。しかしながら先にも述べたとおり、アイルランド人の忍耐強いその生き様が標準英語とは一風変わった英語を誕生させることになったのである。

本稿で扱った二人称代名詞について、*you* は現在単数に、また *ye* が複数形として使われている。*you* の複数形として *yous*, *yez*, *yiz* などでも確認できることも非常に興味深い言葉であると、標準英語とは全く区別できる用法だと思わざるを得ない。*ye* の使用割合も Munster 地方、Connaught 地方では、何ら違和感のない使用例であり、日常的であることに、標準英語とは一線を引くものがある。古代中世英語期の作品調査では確立された形態として、*þe*, *bu* さらに Nom. Pl. の *ȝe* を確認できる。しかしながら、*you* が単複両方を兼ねるなど、混沌とした状況にある事も事実と言える。

アイルランド英語は標準英語とは多少なりとも異なる英語ではあるが、世界にその英語を伝道したアイルランド人としてのアイデンティティは決して消え失せることなく、今後も根強く存続していくに違いない。

注

- (1), (2), (3) 海老島 均、山下理恵子編著、「アイルランドを知るための70章」pp.44-92.
- (4) 海老島 均、山下理恵子編著、「アイルランドを知るための70章」、p.65.
アイルランドの人口は1841年（820万人）、1851年（約680万人）と推定される。
約100万人が死亡、移民による人口の減少は約120万人と推定される。
- (5) Mcrum, R., Cran W. and MacNeil R. *The Story of English*. pp.188-195.
- (6) Carolina P. Amador-Moreno. *An Introduction to Irish English*. p.16.
- (7) _____. *ibid*, p.17.
- (8) Hickey, R. *Irish English*. p.239.
- (9) _____. *Highest acceptance figures (90%+) in A Survey of Irish English Usage for the test sentence Are ye going out tonight?*, p. 238の表より筆者がグラフ作成。
- (10) _____. *Highest acceptance figures (70%+) in A Survey of Irish English Usage for the test sentence What are youse up to?*, p. 239の表より筆者がグラフを作成。
- (11) _____. *Highest acceptance figures (50%+) in A Survey of Irish English Usage for the test sentence What were yez up to?*, p. 240の表より筆者がグラフを作成。
- (12) Bartleby.com (Great Books Online)
free of charge のサイト。http://www.bartleby.com/
- (13) 拙稿「英語圏の歴史と言語（オーストラリア英語の場合）」アイルランド語の影響（名古屋学芸大学短期大学部研究紀要 第8号）pp.38-40.
- (14) 山崎真稔著：「オーストラリアとニュージーランドの英語」pp.114-123.

参考文献

Bennett, J. A. W. & G. V. S. *Early Middle English Verse and Prose*. 2nd ed. Oxford: Clarendon Press, 1968.

- Campbell, A. *Old English Grammar*. Oxford: Oxford University Press, 2003.(rep.)
- Carolina P. Amador-Moreno. *An Introduction to Irish English*. London: Equinox Publishing Ltd. 2010.
- Clemens W. A. Fritz: *From English in Australia to Australian English*.
- Davis, N. *Sir Gawain and the Green Knight*. Oxford: Oxford University Press, 1977.
- Drabble, M. *The Oxford Companion to English Literature*. Oxford: Oxford University Press, 1985.
- Garmonsway, G. N. *ÆLFRIC'S COLLOQUY*. London: Methuen, 1967.
- Henry, A. *Belfast English and Standard English*. Oxford: Oxford University Press, 1995.
- Hickey, R. *Irish English*. Cambridge: Cambridge University Press, 2007.
- Joyce, P. W. *English as we speak it in Ireland*. Dublin: Wolfhound Press, 1991(rep.).
- McCrum, R., Cran W. and MacNeil R. *The Story of English*. London: BBC Books, 1992.
- Peters, P. *Australian English Usage*, Cambridge: Cambridge Uni. Press, 2007.
- Sisam, K. *Fourteenth Century Verse & Prose*. Oxford: Clarendon Press. 1975.
- Shepherd, G. *Ancrene Wisse*, parts six and seven. Manchester: Manchester Univ. Press, 1972.
- Taniguchi, J. *Irish English*. Tokyo: Shinozaki Shorin, 1972.
- Todd, L. *Green English*. Dublin: The O'brien Press, 2000.
- 山崎真稔著：「オーストラリアとニュージーランドの英語」玉川大学出版部、2009.